

成田市宗吾二丁目遺跡(第2次)第2地点



遺跡位置図 (S=1/25000)

宗吾二丁目遺跡は千葉県成田市宗吾二丁目387番地に所在する遺跡で、宗吾・飯仲古墳群の範囲に属し、宗吾霊堂から南東約500mの所に位置しています。宅地造成に伴う埋蔵文化財調査を令和2年に実施し、約9000㎡の面積を調査しました。

古墳時代後期～終末期の古墳が5基(円墳2基・方墳3基)見つかリ、また奈良・平安時代の墓と考えられる土坑が23基、方形周溝状遺構が3基あり、古墳時代から長い期間墓域として利用されていた遺跡であるということがわかりました。



方形周溝状遺構
(左:2号方形周溝状遺構 中:1号方形周溝状遺構 右:3号方形周溝状遺構)

京成電鉄 宗吾飯仲18号墳
(円墳・二重周溝)

宗吾飯仲9号墳
(方墳)

宗吾飯仲11号墳
(円墳)

宗吾飯仲12号墳
(方墳)

方形周溝状遺構のエリア

宗吾飯仲7号墳
(方墳)



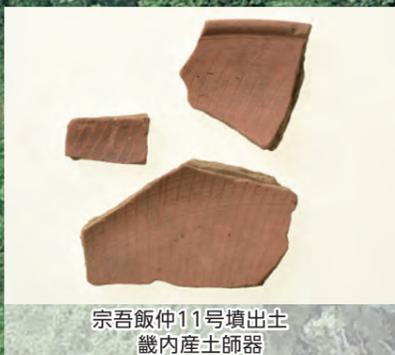
全長: 約80cm



宗吾飯仲11号墳出土鉄刀と石棺内床石破片



宗吾飯仲12号墳出土玉類 (左:ガラス小玉 右:瑪瑙製勾玉)



宗吾飯仲11号墳出土畿内産土師器



出土した東海系の須恵器(長頸壺)
(左:宗吾飯仲12号墳 中:3号方形周溝状遺構 右:宗吾飯仲11号墳)



宗吾飯仲7号墳石棺式石室



宗吾二丁目遺跡では、各古墳に被葬者と共に副葬された遺物が見つかりました。畿内産の土師器、東海地方で作られた須恵器の長頸壺など、千葉県より遠く離れた場所からもたらされた土器もありました。そして古墳の副葬品の代表格でもある鉄製品や玉類なども見つかリ、宗吾飯仲11号墳からは鉄製の直刀、12号墳からはガラス小玉が大量に出土しました。また被葬者を納める石棺の破片も多く検出し、そのほとんどは茨城県の筑波山周辺から採れる石材を使用していました。このように宗吾二丁目遺跡の古墳の被葬者達は、各地方の様々な物を手に入れ、古墳祭祀を執り行っていたことが想起されます。

宗吾飯仲18号墳は平成元年に主体部を含めた一部の調査が行われており、盗掘で大部分が失われていたことが分かっています。規模は全長約50mで二重周溝をもつ円墳としては、千葉県内でも最大級のものです。

宗吾飯仲7号墳は盗掘を受けていたものの、石棺材がほぼ残った状態で見つかりました。当初は箱式石棺という想定で調査を進めていたが、門石や羨道を思わせる板石が発見され、横穴式石室を指向した石棺式石室の造りになっていることが明らかになりました。類例としては、成田市瓢塚古墳群の瓢塚古墳41号墳や栄町龍角寺古墳群108号墳などが挙げられます。

両古墳群は律令制下において印波国造の主要勢力基盤とされています。印旛沼東岸の台地上に連綿と築かれたこれらの古墳群の南端に位置する宗吾二丁目遺跡は、当時どのような役割を担っていたのでしょうか？ 今後は他の古墳群との関係性も併せて注目していきたい遺跡です。